

ヘーゲル『精神現象学』における実践哲学の实在性

川太 啓司

日本大学大学院総合社会情報研究科

Substantiality of Practical Philosophy in Hegel's "phänomenologie des Geistes"

KAWATA Hiroshi

Nihon University, Graduate School of Social and Cultural Studies

In this paper the relation between "Substantiality of Practical Philosophy" in Hegel's important work Phenomenology of the Mind (phänomenologie des Geistes) is considered. Attention is focused on the way and manner of mental development from "Practical Philosophy" through "Substantiality" to "understanding". This is in order to know that the formation of the mind from the simple to the complex is traced in the opening chapter of the work.

はじめに

G・W・F・ヘーゲル(1770—1831)の哲学は、理性の哲学である。その理性は、個人的な意識である自己意識を自覚しながら現実的な立場から客観的な世界を対象として捉えるのである。ヘーゲルによると理性とは、われわれの内にある人間の能力である自己意識と関係する実在的なあらゆるものを現実のうちに、把握するものである。そして、われわれの自己意識は、実在するものと確信しているあらゆる現実的な世界が自分自身のうちにあることを捉えるのである。このような現実と自分自身との関係は、様々な仕方でもって関わっていると確信しているのが理性的な自己意識なのである。こうした理性は、対象である世界とそれを捉える自己意識との統一であって、現実をわれわれとは無関係なものに見なさない理性である。対象を捉える理性は、具体的には各人が自然や社会という世界について考察する内容を客観的に判断することのうちに、現実と一致しているものを把握するのである。そこで理性は、自然や社会の普遍的な本質を理解することのうちにわれわれと世界は無関係ではなく、世界と深く結びついていることを確信するのである。

このような理性は、われわれ人間を取り巻く自然や社会において関係することで確信することを目指す

すものであるのだが、まだその確信は実現していない。だがしかし、理性的な自己意識は、その確信を次第に実現して自然的な理性が真なる客観的な行為する理性となってゆくことを目指すのである。そこで本稿の課題は、観察する理性から行為する理性を現実のうちに自己と関係するものを捉えて吟味することで、そこに実在する客観的な認識を確立しようとするところにある。まず端初的な理性は、自然や社会を観察することで自己を見出そうとする観察する理性として始まるのだが、その理性が無自覚なままに理性自身の本質を見出そうとするのである。そして、行為する理性は、自然や社会のなかに自己の確信する理性的な秩序を実現しようとするのだが、それはまだ対象のなかに自分を実現する個人的な行為する理性に過ぎない。そこにおいて実践的理性は、社会的な共同体を意味する社会秩序のなかで行為することによって、自己と普遍性との一致を見出すのである。そうすることで自己意識は、対象世界を概念的に把握し、われわれにとっての実践哲学の实在性を捉えるところにある。

第1章・観察する理性と自己意識

一般に理性とは、われわれ人間の考える能力である悟性に対して、統一的で実践的な知識に基づく思

惟する能力である。こうした理性は、われわれ人間が捉える現実的な社会生活において合理的なものを見出してゆく自己意識であり、そこにおいてヘーゲルが捉える理性は弁証法的な思惟であると規定されている。そうした理性は、観察する理性から行為する理性へと到る思惟の発展過程であって、しかもその思惟が歴史の発展法則の原理とされている。こうした理性を捉える思想は、感覚的で自然的な世界を人間の純粋な思考によって自然や社会を能動的に変えてゆくものである。また、このような理性は、対象を捉える上で感覚の能力である感性に対して概念的に思考する能力である。さらに、実践上では、本能や衝動と感性的な欲求だけで動かされるのではなく、人間的で社会的な共同のうちに正しい行為を包含するものである。だから、こうした理性は、感性に基づく客観的な対象の変化や発展を捉える思考の実践的な働きをするのである。

そこにおいてヘーゲルは「理性は意識と自己意識との、言い換えると対象の知識と自己の知識との最高の統一である。理性は、理性の諸規定が我々自身の思想であると共に、また对象的でもあり、すなわち物の本質の規定でもあるという確実性である。理性は自分自身の確実性、すなわち主観性であると共に、有または客観性でもあるが、ここではこの両面は一個同一の思惟のなかにある」(1)と述べている。こうした理性は、われわれ自身のうちにあるその内容が単なる表象や思想のなかにあるものでなくて、対象である世界をそれ自身のうちに存在する対象の本質を意味するものである。したがって、対象の内に客観的な実在性を持つと言うことの意味は、自己意識の内容が自我に対して決して外来的に何ら与えられたものでもない。自我によって捉えられた内容は、自己意識のうちに同化されその意味でまた自我のうちに包含された内容なのである。だから、理性的な知識は、対象を捉える客観的な確実性でありそれは真理でもある。こうした真理の本質は、確実性と対象性との統一のうちにあってそれは対象意識と自己意識との統一なのである。

ヘーゲルよれば、理性としての現実的で自覚的な「実体は概念の主観性と概念の客観性・一般性との単純な同一性である。それ故に、理性の一般性は、

純粋自我、すなわち客観におおいかぶさり客観を自己内に包括する純粋形式の意義をもっていると同様に、意識そのものにおいては単に与えられたものに過ぎないが、しかし今やそれ自身一般的であり自我に浸透し自我を包括する客観の意義を持っている」(2)のである。このような理性である自己意識の規定は、自己意識がそれ自身の思想であると同時に対象的な世界の本質をなす規定でもある。だから、確実性としての自己意識は、現実的で社会的な観察する理性であってこの理性は同一性としての実体のうちに見られる、理性的な知識としての真なる実体なのである。なぜなら、真なる実体は、独立的に実存する純粋な概念である自我と無限な一般性としての確実性を特有な規定性として、内的な形式のうちに持っている。だから、この理性的な知識の真なる実体は、精神的な人間なのである。

観察する理性は、あらゆる実在性であるという確信が真理にまで高められ理性が自己のうちに自分の世界として、また世界を自己のうちに意識している時の理性が精神的な人間なのである。この精神的な人間の真なる実体は、それは直前におこなわれた意識活動でありこの意識化において自己意識の対象である純粋な概念が、客観的な理性の概念にまで高まったものなのである。このような理性は、自我という概念と客観的な存在との純粋な統一であって、それ自体として自覚的で即自的な存在として規定されておりそこで観察する理性の自己意識が、自分自身を見出すのである。だがしかし、観察する理性の真理は、実のところこのように無媒介に見出そうとすることのうちに、理性の無意識的な定在を止揚することにある。こうした理性は、直観されていた概念に見出されていたものが自我の対自的な存在である自立的な存在を意識のうちに取り込むことで、主体的で対自的な存在が対象的な実在のなかで自分自身を知るようになる。

このような理性は、精神的な人間の実在でありすでに人倫的な実体と呼ばれている精神が、人倫的で現実的な実体なのである。こうした精神的な人間は、現実的な自己意識であり精神的な自己意識が対象的で現実的な世界として、対立して現れるのである。しかし、われわれを取り巻く世界は、同時に自己に

とって無関係なものではなく様々な対象世界が関係している。同じ様に自己は、対象世界から分離された対自的な存在である自立的な存在という意義を持たない。このような精神は、実体であり普遍的な自己の同一的で持続的な実在である。この人間的な精神は、われわれのすべての行為に動かされない根幹をなす端初であり、すべての自己意識の思考された実体として我々の目的をなすものである。そして、われわれの行為は、この実体によって我々のうちに同一性として生み出される普遍的な実在である。なぜなら、この実体は、主体的で対自的な存在の自己意識であり行為だからである。

対象を捉える理性は、それが直接的で無媒介な真なる実体である限りにおいて人倫的な存在であり、個体であると共に一つの世界である。こうした理性的な知識である人間的な精神は、それが直接的で無媒介にあるものを意識するところまで、進んでゆかざるをえないのである。そのことは、一般的で人倫的な生活を止揚して一連の諸形態の展開することを通して、己について知ることになる。その際に区別されるのは、これらの形態が先行する諸形態から直接的で実在的な精神であり、本来的で現実的な実体であって単に意識の諸形態であるのではなく、世界の諸形態にあるのである。だから、活動的で人倫的な世界は、観察的な理性の真なる実体における精神なのである。この端初的な理性は、自分の本質について抽象的に知ようになるがそのとき人倫は、抽象的な普遍性へと移行するのである。こうして理性は、今やわれわれの中で分裂するがこの分裂した理性は堅固で現実的な自分の対象的な境地のなかに、自分の一方の世界である理想を描き出し、この世界に対立して思想の境地のなかに、理性の世界と実在の国を描き出すのである。

しかし、観察する理性は、このような自分自身の喪失から自分のなかに還帰してゆくのだが、こうした理性は概念によって捉えられる。こうした実在的な世界は、理性的な精神の普及である啓蒙によって混乱させられ、変革がもたらされる。だから、実在的な世界は、理想の世界が広がりやがて自己意識のなかに帰ってゆくその時に、自己意識は人倫において自分自身を実在する真なる実体として、捉える

のである。そこで実在的なものは、現実的な自己意識として捉え自分の世界とその根拠とを自分の外に現出させて定立したりせず、あらゆるものを自分のうちへ解消させる。このような観察的な理性は、人倫的なものとしてわれわれの内にあるものだという確信を持つことによって、人間的な精神となるのである。こうした人倫的な世界は、実在的な世界と彼岸に分裂した世界での道徳的な世界観が人間的な精神なのである。こうして観察する理性は、対自的に存在する単純な自己へと運動し還帰してゆくことで、展開されるのである。

このような人間的な精神は、理性的な自己意識である目標の結果として絶対精神の現実的な自己意識が現出してくるのである。この観察する理性である自己意識は、自分自身で存在し区別のないものを区別するような形で自己を意識している。その区別の側面は、不幸な意識において頂点に達したが同時に観察する理性である自己意識を媒介とすることで、統一に達したのである。こうした統一を意識することは、あらゆる真理であることを確信することで意識は実在的で観察的な理性であることを、自覚するようになる。だから、観察的な理性は、すべてにおいて実在であるという意識の確信であってそこで観察的な理性は、観念論の形態をとって現れるのである。観察的な理性は、理性がもはや自己意識のように対象に対して消極的な態度はとらないで現実との間での和解は、現実には耐えるものとなっているから現実を同時に自分自身だと、確信するようになっている。こうした観察する理性は、自己意識の思惟がそれ自身現実となっているのである。

対象となる世界の真相は、観察的な理性である自己意識のうちにある。われわれを取り巻く対象世界は、自然や社会を対象とする観察的な理性にとって無縁なものではなくて即時的にはこの対象により、自己が承認されている。その意味において観察する理性の精神は、二重になっており両者に自立性を許しながらも自己自身との統一を確信している。そして、この確信するものは、観察的な理性が自己意識の真理にまで高めることでその確信は、普遍的な実在へと繋がるのである。その意味において観察する理性は、自己に対して或る物を自覚的に対応するこ

とで行為する理性に移行してゆくのである。こうした移行は、はじめは自らを個人として意識しているに過ぎない。そのためには、個人としての自己の現実を他者のうちに要求として生み出さねばならないし、次いで個人の意識が一般性に高まるときに社会的な理性となり、そのことを自覚するのである。その意味においてわれわれは、概に承認されたものであることを捉えることになる。

このような理性は、われわれの納得しうる合理的なものを世界のなかに見出し、実現しようとする自己意識である。こうした理性は、自己意識だから自己の自立性と確実性を求めるものだがその対応の仕方は、各々において異なっている。これまでの自己意識は、他者との相互浸透の関係において自分を認めさせようとしたのである。だがしかし、こうした理性は、外側の世界を否定しようとはせずにむしろ対象世界のなかで自己を求めようとするのである。このような理性は、自然を観察してそのなかで合理的な法則が貫いていることを確認しそのことによって、世界と対応するのである。そうして対象社会に対しては、われわれの納得できる合理的な社会秩序に作り変えようとするので、改めて社会と個人についてどういう関係にあるかを捉えるのである。こうした理性は、対象世界を他在的なものから自分たちの納得できるものに変えてゆくことによって、世界のなかで自己を見出そうとするのである。ここにおいては、理性がわれわれを取り巻く自然や社会である世界において理性的な秩序を見出そうとすることで、様々な経験をつむことになる。

このような理性は、われわれを取り巻く世界である自然や社会を記述したり分類したりして対象を捉え、そのなかで自然的で社会的な法則を見出そうとする。この理性は、また生命体をも観察して環境と人間との関係を把握することでわれわれ人間の特質について、環境との関係において捉えるのである。こうした自然的な観察は、これらにとどまらずに抽象的な概念や法則にまで進んでゆくがこの進行は、感覚と結びついた個々の雑多で具体的な事例を統一的に理解しようとする。観察的な理性は、最初は自然に対して感覚的な受容に接する態度に始まって次第に感覚を捨象して、思考によって自然を能動的に

対応してゆく歩みに移行してゆくのである。こうした思考する理性は、感覚的な自然を純粋な思考の作品に変えてゆく歩みである世界にも思考の作品を作り出して、それらを自らの思考の作品へと作り変える。このような理性は、対象となる世界を固定的なものとしてではなく過程的なものとして対象となる世界を、概念的に把握するのである。

こうした観察的な理性は、対象世界を概念的に把握することで現実を具体的に捉え社会的な共同体の法則を見出そうとするのである。そこで、こうした自己意識を捉えるイポリット(1828—1893)は「この自己意識は、経験を経てその孤立の状態から精神的な実体にまで高まってゆくのであるが、われわれは、こうした自己意識の経験を追わなければならない」(3)としたのである。さらにイポリットは「この自己意識が多量の犠牲をはらって学ぶことになるのは、自分の幸福が考えられるのは社会的組織体においてのみであり、人倫的生活のなかだけであるということである」(4)と述べている。このようにイポリットは、観察的な理性から行為する理性の認識過程を捉えているのである。そこでの理性の在り方は、実践哲学の社会的な実在性を視野に入れている。行為する理性である自己意識は、基本的には感覚や知覚そして悟性と言う意識の在り方のうちに対象的な意識の次の段階で扱われ、実践的な性格を持った意識として考察されるのである。

そこにおいてヘーゲルは、理性を悟性と合わせて考察することで理性的な思考という人間のもつ思考能力と捉えている。その捉え方は、客観的な観念論のためにわれわれを取り巻く自然や社会について本質的には、理性的で精神的なものうちにあると捉えるのである。だから、ヘーゲルは、自然や社会という対象を概念的に捉えるに人間の持つ能力を主観的な理性にあるとしたのである。そこで、われわれ人間を取り巻く世界に対応する真なる捉え方は、そこに内在する社会秩序や共同体に関係する対象を客観的な理性にあると把握するのである。このようにわれわれは、人間の能力としての主観的な理性と現実的な社会を構成する共同体における相互関係のうちに、客観的に対象を捉える理性とこの関係を客観的に把握することにある。そのことの意味は、観察

する対象世界を理性や精神のうちに捉えるのではなく対象世界を現実的に把握するのである。そのことは、やがて観察する理性から対象世界を把握する行為する理性へと移行することになる。

第2章・行為する理性と自己意識

ヘーゲルよれば「自己意識は物を己れとして、また己れを物として見出したが、このことは、自己意識が即時的には対象的な現実であると言うことが自己意識に対して対自的であることを意味する。自己意識はもはやあらゆる実在性であるという無媒介の確信ではなく、確信ではあっても、この確信にとっては、かえっておよそ無媒介のものが止揚せられたものであるという形式をそなえている」(5)と述べている。ここにおいては、確信が自体的に現実的な対象であると言うことが自己意識において自覚されている。行為する理性は、もはやすべてにおいて実在であると言う直接的な確信ではなくて、むしろ直接的なものや一般を廃棄されたものとして、自分が意識しているような確信なのである。そのため直接的なものである対象性は、まだ表面的なものとして見られているにすぎない。この表面的な内なる本質は、自己意識であるそのもの自身なのである。それ故に行為する理性は、積極的に関係する対象を捉える理性的な自己意識である。

行為する理性である自己意識は、対象には肯定的に関係してゆくからこの対象はそれ自身ひとつの理性的な自己意識である。こうした対象は、社会的共同であることの形式において対象は自立的なのである。だがしかし、理性的な自己意識は、この自立的な対象が自分にとって何ら無関係というものではないという確信を持つのである。こうした理性的な「自己意識は即時的には自分がこの対象によって承認せられていることを知っている。自己意識は精神である、即ち二重の自己意識となりながら、またこれら両者がそれぞれ自立的でありながら、自己自身との統一を保っているところの精神である」(6) それだから、こうした自立的なものは、行為する理性のもっているこの確信がいまや自己意識にとって真理にまで、高まらなくてはならない。行為する理性は、また内なる確信においては或るものとして妥当して

いるが、この或るものを行為する理性である自己意識のなかに取り込むことで、自己意識にとって対自的となるべきなのである。

この理性の現実化においては、普遍的なものが何であるかと言うとこの現実化をこれまでの過程と比較することで大枠が明らかになる。すなわち「理性は観察を行うに際しては、範疇と言う場面のうちで意識の運動をすなわち感覚的な確信と知覚と悟性とを繰り返したが、これと同じように、理性もまた自己意識の運動をもう一度遍歴して、自立性から自分の自由へと移って行く」(7)のである。ここにおいては、理性の基本概念である行為する理性の自己意識が自分をただ一つの個体として、自覚しているに過ぎずそこにいて関係するものとして己の現実性を、他者のうちに求め生み出すのである。しかし、そこにおいては、行為する理性である己の意識が普遍性にまで高まると個人は普遍的な理性となる。そこで自分自身が、理性であることを自己と向き合うことでそれ自体として承認させられたものであることを、自覚するようになる。そのような純粹意識において承認されたものは、あらゆる自己意識を統一づけているのである。

行為する理性は、自分自身が理性的になることを自覚することであり、かくしてあらゆる行為する理性である自己意識を統一づけているものが、単一的で精神的な人間の実在なのである。だがしかし、理性的な自己意識は、この実在が同時に意識をもったものになるとこの実在は、現実的な実体である。行為する理性は、現実的な実在性を捉えることであるからこの「実体のうちでは先立つ諸形式は自分たちの規定のうちに帰入しているのであるから、したがってこの規定に比すれば、これら諸形式は規定が生成するうえでの個々の契機であるにすぎぬ」(8)ものである。だから、実在するこれらの契機は、孤立して各々が独自の形態として現象するけれども実際においては、この規定によって支持されることにのみ定在と現実とをもつのである。これに対して真実である実体を得るのは、この現実のうちに規定の形式に実在するそれ自身のうちにあり、そこに止まるかぎりのことに過ぎない。

真なる実体である「実践的精神は単に理念をもつ

のみではなくて、生きた理念そのものである。それは自分を自分自身から規定し、その自分の諸規定に外的実在性を与えるところの精神である」(9)だからして、実践的で理性的なものは、観念的にのみ自分を対象にして客観化するのである。こうした自我は、実践的で実在的に自分を対象にして客観性とするような自覚的な自己意識とは、区別されねばならない。そのことは、自己意識である自我がすべての自分の規定性を捨象することで無規定に存在し、自分自身との同等性のなかにとどまる限りにおいて実践的な精神は、自由な意志なのである。そして「内面的に規定する概念としての意志は、本質的に活動性であり、また行為である。意志は自分を理念として表すために、自分の内的諸規定を外的定在の面に転置する」(10)のである。だから、このようにして作り出された定在は、変化と直接的な関連をもつ規定のすべてが意識的な行為なのである。そして、その諸々の規定のなかでは、自由意志や行為する理性的な自己意識のなかにあったものだけが、生き生きとした活動的な行為なのである。

この自由意志は、こうした行為を自分のものと認めることで自分に本来的に帰せられることのできる自分の責任として、是認するのである。しかしまた、行為の諸規定は、意識されていなかったがそれを意識することで責任が生じる。自己意識のうちなる実践的な感情も「実践的な法的並びに道徳的規定と法則を捉えているものではあるが、しかしその把握は直接的であって、従って未展開のままであり、思惟が加えられておらない。何よりもそこには主観的個別性が混入しているために、その把握は不純になっている」(11)こうした、理性的な自己意識は、直接的で実践的な感情が捉えているもので明確に意識された法や義務であるのだが、その他において色々の法則と内容的に違ったものではない。また、こうした実践的な感情は、理性的な自己意識が一面では不明朗なままで個別性を通して捉えられている。だが他面においては、この実践的な感情も法や義務などその他の法則の各々の側面ではっきり分かれるものである。その限りにおいて個別性は、規定的な意識を超えて客観的で実践的なものになる。

行為する理性である自己意識のうちには「実践的

規定の感情であると同時に、その矛盾の感情であること、すなわち実現されないが実は実現されるべきものであると言う内的なもの、これが衝動である」(12)このような、衝動的な行為は、理性的な自己意識である主観的な自然性だからそれはただ自分の規定性だけに固定されている欲望が、衝動の個別的な規定性なのである。そこにおいては、外的な定在である周りの諸条件が欲望に適合するか適合しないかによって、快や不快な感情が生じたりする。衝動と欲望の形態に関わる実践的な精神は、自然的に関わっているから他に依存する不自由な精神である。このような精神は、この衝動に没入している状態から自分を引き上げて一般的な普遍性に高めねばならないのである。すなわち、この衝動の特殊化は、それ自身が絶対的なものと見られるべきものではない。この衝動の規定は、総体性の契機となる時に初めてその位置と正常の価値が与えられることによって、主観的な偶然性から純化されるのである。

自己意識の意志としての精神は「自己を自己内で終結させるもの、自己を自己の内から充実するものとして知っている。この充実された独立存在または個別性は、精神の理性の現実存在または実在性の側面を形成する」(13)のである。だから、ここにおいては、精神的な意志として現実的な実体のなかで自己意識が知識として概念の一般性の基底の上に、存在するのである。われわれ自身の意志は、内容を与えるものとして我々自身のもとに存在する自由一般であり、これが意志の規定された概念である。われわれの自由意志は、意志自身によって充実されると言うことの意味を捉えることで、抽象的な規定性や意志自身の規定性一般に過ぎずに、まだ発展した理性と同一化されていない。こうした自由意志の有限性は、この形式的な自由のなかには存立している。潜在的な自由意志の規定性は、形式的な自由における意志が現実的な存在へもたらすのである。

形式的な自由における「形式的意志の目的は、自己を自分の概念によって充実すること、すなわち自由を自分の規定性・自分の内容および自分の目的ならびに自分の現存在にすることである。この概念すなわち自由は本質的にもっぱら思惟として存在する」(14)のである。このような自由は、意志が自分

を客観的な精神にするための過程であると把握することによって、自己を思惟する自由意志に高めるのである。その自由意志は、ただ自己を思惟する意志としての内容を自分に与えるのである。こうした真なる自由意志は、人倫性としての意志が主観的な関心を自分の目的として持つということではなく、一般的で社会的な普遍性をその内容のうちに自分の目的として、持っているのである。だがしかし、このような内容は、ただ思惟のなかにのみ存在した単なる思惟によってのみ存在するのである。だから、このような内容は、われわれの内にある人倫性や宗教性と適法性などから思惟を排除しようとするもので、これほど不合理なことはない。

行為する理性が対象とする世界は、共同的な秩序を持った現実的で社会的な世界なのである。ヘーゲルは、そこにおいて自分自身の目的やわれわれが理想とする世界を自己実現しようとするのである。そこでヘーゲルは、行為する理性を理性的な自己意識とも呼んでいるのである。この理性的な自己意識は、自己を確立し実現しようとする点では他の自己意識と同じ側面があるからである。だがしかし、問題となるのは、ここにおいて社会的な秩序の成立がすでに前提になっているのである。たとえば、理性的な自己意識は、他者との対立と相互浸透のうちにあるのではなくて、他者との社会的な共同の関係に見出すのである。行為する理性である自己意識は、様々な要求を捉える場合においては個人的で社会的な要求ではなくて、ここではわれわれにとっての社会的な共同を求めるものなのである。つまり、理性的な自己意識が求めるものは、何らかの意味で社会的な基底のうえに成り立つ共同的で普遍的な自己確信に過ぎないものである。

理性的な自己意識は、社会的な共同体のうちに他者や社会秩序と関係するがこの自己意識が経験するのは、社会的な共同体のうちに実在する社会秩序との対立である。理性的な自己意識は、共同的な社会秩序がわれわれに対して諸条件のうちに様々な理性的な経験をするのである。そして、その経験の過程を経て最後には、現存する社会秩序や共同体のなかで様々な関係において理性的な秩序を見出して、社会秩序と共存するのである。この社会的秩序との共

存の意味は、行為する理性である自己意識の経験にあるのだが快樂を目指す自己意識は個人的な目的だけを求めて、社会的で普遍的な秩序とまったく対立するのである。他在的で理性的な自己意識は、同じように現実の法則や秩序と対立するけれどもわれわれ自身が普遍性の要求を、内在的に捉えていることが異なっている。ここでの普遍性の要求とは、社会的な正義や善を求めることなのである。

各人の理性的な自己意識は、正しい生き方や正義や善などは問題にならないのであるから、個人の問題から社会的なわれわれに取ってという視点が入ってくることによって、初めて正しい生き方や正義や善が問題になるのである。ここで登場するのは、このような正義や善が法則を問題にする新たな自己意識の考え方なのである。われわれに取っては、各人の欲求や快樂こそが善なのである。だから、われわれの欲求や快樂が、そのまま社会法則にならねばならない。各人においては、欲求や快樂を求めれこそが社会秩序として実現されねばならないと考えるのである。つまり各人は、われわれの幸福の実現を求めそのことによって自分の人間としての在り方の本質を、行使しようとするのである。こうした新たな行為する理性である自己意識は、そこにおいて社会を変革しようとするのである。だから各人は、自分の幸せとわれわれの幸せを一つに繋がるものとして求める善意の社会的な共同体を求める普遍性を、供えているのである。

理性的な自己意識は、物を自己としてまた自己を物として見出すのであるが自己があらゆる実在であり、対象的な現実であると言う確信から始まる理性がこの確信を、対自的で自覚的なものとすることを意味する。そこで新たな対象は、対象意識の形式において実在的であり自立的なのである。しかし、こうした理性的な自己意識は、自立的な対象が自分にとって他在的なものでないことを確信している。すなわち、この自ら捉える対象は、他在的なものを包含した自己意識であり自分がこの対象によって承認されている。この承認の意味は、理性的な自己意識が各々において人間的な精神となって各々の自己意識となり、各々が自立的でありながらしかも一つの個体であるようなものだからである。だが人間的な

精神と言うこの在り方は、現時点では主観的な確信にとどまっているものであり、これが客観的な真理にまで高まらなくてはならない。だから、自覚的な理性は、こうした確信を行為することによって実現しようとする実践的な理性なのである。

このような、理性的な自己意識の発展は、観察する理性が意識の運動を繰り返したように理性的な自己意識の運動を繰り返すことになる。観察する理性は、ひとつの固体性としての自己を他者のうちに求めるがそれが普遍性にまで高まると自分が理性であり、自体的に承認されたものであることを自覚するようになる。そこで行為する理性的な自己意識は、あらゆる自己意識を統一している単一で精神的な本質の存在が意識されてくる。この自覚された精神的な本質は、現実的な実体とも呼ばれている。こうした自己意識の形態は、この実体における諸契機にすぎずこの実体のなかでのみ定在と現実性を持つのだが、そのことも次第に自覚されてゆくことになる。こうした理性的な自己意識は、このように自分から自由な他の自己意識のうちにおいて自分自身であるという確信を持つのである。理性的な自己意識は、まさにそうすることによって真なる実体のうちに承認された自己意識を目指して、進んでゆくことになる。こうした理性は、社会的な秩序と関係するがまだそれは個人的な意識に過ぎないものであり、実践的な理性への始まりである。

第3章・実践哲学の実在性

ヘーゲルによれば理性的な自己意識は「最初はただ我々がそれについて持つものであるに過ぎなかったが、いまや自己意識が自分についてのこの概念、即ち自分自身についての確信においてあらゆる実在性であるという概念を把握するに到っている」(15)のである。ここにおいては、自己意識の概念を把握することの意味が実在的な目的であり、本質的なものであってさらに普遍的なものや実在的だと自覚する個性との相互浸透のうちに、見られるものを捉えることである。その実在的な自己意識の内容は、行為する理性の実在性が相互浸透の契機と統一の内に取り入れられる以前において考察されたものが、実在的な目的なのである。これらの目的とする内容

は、精神的な自己意識の最初の諸形態に属するところの諸々の抽象や現象として、消滅したものである。われわれの実在的な自己意識の主観性の内には、欲求され思念された存在のうちのみ真理を持つのであって、自らが自覚的に己の実在性を確信している理性において真理を持つのである。

このような、理性的な自己意識は「直接的に存在している現実へ対立している己を目的として初めて実現しようと求めるものではなく、かえって己の意識の対象としては範疇そのものをもっている」(16)のである。ここにおいては、行為する理性が自己意識の基本概念を対象とした自分だけで存在しているのである。その現実的なものは、否定的な自己意識であるという規定性においてのことである。だがしかし、こうした規定性は、撤廃され社会的な行為する理性としての実在性が確立したものである。このような、行為する理性である自己意識は、自分自身のうちに否定的なものを包含した現実を見出してこの現実を止揚することによって、自分の目的を初めて実現するのである。しかし、この行為する理性は、目的であり即自的な存在であるものが他者に対する存在と見出され、現実的に実在するものと同一であることが明らかとなる。そこで客観的な真理は、主観的な確信から分離してはいないわれわれにとっての実在性なのである。

理性的な自己意識は、この際に定立された自己意識の目的の方を持って自分自身についての確信であると理解する。その内的意味は、この自己意識の目的の現実化をもって真理と理解しようとしても、それとも反対に自己意識の目的の方を持って真理ということが現実をもって確信されて理解しようとしても、真理はもはや確信と分離しているものではなくて実在性なのである。そのことは、自らが捉える自覚的な本質であり自己意識の目的であるものがそのまま直接的な自己意識の実在性について、確信するのである。だから、それらの関係は、普遍的な実在だと自覚する個性である自己と社会的存在との一致という概念が相互浸透のうちに、関係しているのである。そこで行為することは、それ自身において真理であり現実的な実在性なのである。またそのことは、実在と自覚する個性性という自己と社会的存

在との一致という概念が対象を表現することで、行為することが自覚的になるのである。

自覚的な自己意識は「個性性のかかる概念の成立と共に、範疇が自己意識に対して、また自己意識の範疇に対する態度が先ず観察する自己意識として、次いで行為的な自己意識として持っていた互いに反対の規定から、自己意識は、己のうちに還帰したのである」(17)だから、このような自己意識は、観察する理性から行為する理性への発展を基本的な概念として捉え、それをもって自分を対象としておりその自己意識は己れ自身を、自覚するようになった概念なのである。そして、この自己意識は、観察する理性から行為する理性である自己意識へと発展するのである。ここにおいてヘーゲルは、自覚的な自己意識である行為する理性の弁証法的な発展過程を展開しているのである。だがしかし、ここに見られる発展過程は、理性的な概念の自己運動であって対象である社会関係における共同体の発展過程を捉えたものではない。このような捉え方は、対象である事物の発展過程とそれを捉えるわれわれの認識過程を概念の自己運動と混同しているのである。

ヘーゲルは、理性的な自己意識を包含する「精神の諸規定はその諸々の法則を形成する。しかし、それらは精神の外的な、または自然的な規定ではない。すべての規定を含む精神の唯一の規定は、精神の自由である」(18)と述べている。こうした精神の自由は、人間的で精神的な形式であると共にまた内容でもあるからこの人間的な精神が、行為する実践的理性の法則を形成する規定ともなり得るのである。こうした実践的精神は「自己規定を自己のなかに最初は直接的な仕方を持っている。そのことによって実践的精神の自己規定は形式的である。その結果実践的精神は自己を自分の内面的本性のなかで規定された個性性として見出す」(19)のである。このような実践的精神は、行為する理性的な自己意識であり実践的感情であることを確信するのである。実践的精神は、潜在的で自体的には理性的なものが主観性であるから確かに実践的感情のなかに理性の内容を持っている。しかし、実践的精神は、実践的感情のなかに持っている理性の内容は直接的には個別的な内容であって、把握する内容は自然的で主観的なもの

なのである。

そして、理性的な自己意識の内容は、欲求や思念などの特殊性と一般性に対して自己を独立的に措定する主観性から自己を規定すると共に、潜在的で自体的な理性に適合したものである。われわれ人間は、実践的感情を伴っている自分のなかにもっている法の感情・道徳性の感情・宗教の感情・人間の慈愛深い傾向性・人間の心情一般などのあらゆる種類の実践的感情を結合することで、自分のなかにもっている理性的な主観性を形成している。そのような場合には、もしこれらのものに訴えられるならばこれらの規定は主観自身の内在的な規定であるという正しい意味を持ち、次いで感情が悟性に対立させられる。その限りにおいて感情は、悟性の一面的なものであるから非本質的なものである。このようにヘーゲルは、理性の形態において「思惟されたものとして存在している理性的なものは、よい実践的感情を持っている内容と同一な内容である」(20)としている。しかし、この実践的な理性の内容は、理性の形態においてその一般性と必然性がその客観性と真理性において存在しているのである。

実践的な理性の内容についてヘーゲルは「実践的感情は当為を、潜勢的に存在するものとしての自分の自己規定を存在する個性性に、関係させて含んでいる。そしてこの存在する個性性はただ右の自己規定に対する適合性においてのみ価値あるものとして存在する」(21)のである。こうした自己規定性を包含した個性性は、この直接性においてはなお客観的な規定が欠けているから、現実的な存在に対する欲求の関係はまったく主観的な感情なのである。このような、実践的感情においては、意志が自己自身との単純な同一性という形式のうちすでに差異が現存している。なぜなら、実践的感情は、もとより自己を一面では客観的に妥当する自己の規定作用として自己自身において規定されたものだからである。だがしかし、同時に他面においては、直接外から規定されたものとして自分にとって無関心な規定性に従わされたものなのである。

このような実践的な理性は、世界を生きる人間の行為と現存の社会秩序を概観してそれに内容の不合理を批判し、自由を求めてゆくのである。だがしか

し、その経験を通じてわれわれが学ぶものは、個人の行為と言うものが持つ独特の意義なのである。そのひとつは、行為が個別性と普遍性を総合するものであって、行為する意識は自分自身の行為であるから自我的な動機を持つけれども、同時に普遍的で公共的な意義を持つものを生み出すのである。もうひとつは、行為が社会的な秩序や共同に関係することで主観と客観を総合するものであると把握するのである。この実践的な理性は、われわれのうちに潜在的な素質や能力がそれ自身としては正しいものとして現実化し、客観化するからである。だから、この実践的な理性は、われわれが次第にこのような行為の意義を自覚してゆく過程なのである。この自覚が深まった時に個別性と普遍性は、主観と客観の対立が克服されて人倫の国である自由と共同が実現された社会的な理念が実現するのである。

こうした実践理性は、目的や結果というような諸々の契機があるがそれらはすべて自分の内なる自己意識によって、おのずと決められるのである。われわれが何らかの関心を持つことは、行為をする目的を抱くのも自分のなかの自己意識が働いたからである。こうした行為する目的を達成するためには、行為する手段や能力という自然的な素質が必要である。それらを働かせ生み出した結果である作品は、自分の内的な自己意識が外界に形成されたものに他ならない。こうした行為の結果である作品は、自分の内的な意識の表現なのであるから肯定されるべきものである。だがしかし、こうした行為と対象である作品の間には、再び差異が生じてくる。なぜならば、行為と作品の間には、結果である作品を見て様々な相違する意識が発生してくるからである。われわれが作品を造っている最中の意識は、自分と作品は一体性が保持されるがいったん完成してしまうと自分の目的と現実の作品との間には、相違のあることが意識されるようになる。

だから、われわれにとっての実践理性の実在性は、反省的思考を持つことで自分の作品を見つめ直すことは必然的なのである。こうした実践理性の実在性は、自分自身を確信することにおいてあらゆる実在性が確立するのである。実践理性の概念は、自分と世界とは確かに繋がっていると言う以前はわれわれ

が自覚していただけだったのであるが、いまや自己意識がその対象である社会的共同体を概念的に把握している。それに伴って理性的な自己意識は、目的であり本質であるものが普遍的な諸々の能力と実在だと自覚する個性とのうちに自動的な、相互浸透の関係にある。これまで自己意識が抱いてきた目的は、現実に対立したものや単なる思い込みに過ぎなかったものがここでは、そういうものではない。ここにおいては、われわれの存在を捉え実在だと自覚する個性と相互浸透が成り立っている。そして、行為することの内には、それ自身が真理でありまた実在だと自覚する個性を表現することが行為によって、自体的な目的なのである。

そこで実践理性は、理性の概念としてあらゆる実在性であるという確信があったのである。こうした理性の実在性について高田純は「真の実践的自由は、他者の自立性を奪うことなく、そのなかに自分の自立性を見出すことにある」(22)と述べている。このように、われわれ人間は、日常的な衣・食・住という共同的な社会生活を営むことのうちに他者と一体なものとして見なし、他者のなかに自分を見出すのである。そこにおいてわれわれは、社会的秩序と共同的な社会生活のなかで他者を自分にとって必要なものとして承認するのである。こうした承認については、初めて他者のなかに実践理性の実在性が確信される。そのことの意味は「人間は他者を自分と同様に自立的なものに見なし、他人の中に自分の自立性を見出す」(23)ことなのである。だから、われわれの実践理性の行為は、自己と普遍的なものが現実とを繋ぐものとして自覚的に意識されるのである。そこにおいては、この行為自体を自己目的とする自己意識の経験がここで展開されるのである。

意識され実在だと自覚する個性は、まずその本質的なものとして根源的に規定された意識として現れてくる。なぜなら、根源的な限定とは、その本質的なものに内在する存在において否定性が現れたものだからである。だから、この個性は、われわれと社会的存在との一致と言うものが制限されていることになるが、しかしこれも行為を制限することにはならない。ヘーゲル弁証法は、絶えずそれまで以前の段階を否定するものであってこの対象に内在す

る否定性が、存在のうちに固定された仕方で見れると限定となる。なぜなら、このような限定とは、対象である世界の無限定な状態の否定だからである。それに対して本来的な否定性は、行為するという実践的な運動において現れてくるのである。こうした行為は、それまでの状態を否定し乗り越える実践的な運動だからである。なぜなら、このような限定は、純粹で普遍的な場面であってその場面のなかで実在だと自覚する個性は、自由に自分を展開してゆることができるからである。

そして、この限定された意識は、自己意識が抱く目的の内容をなすものである。その自己意識が抱く目的の内容は、この根源的な意識である実在だと自覚する個性が行為することによってそのなかに各々の契機が区別されてくる。すなわち、最初の意識のなかにある目的は、これを実現し移行させることで次の契機が手段と行為するものから外界に出た結果である作品なのである。ここで肝心なことは、これらのどの契機においても自己と社会的存在との一致と言う実在性だと自覚する個性の概念が、保たれていなくてはならないのである。各々の契機では、目的が限定された意識が目的の唯一の内容であってこれが、行為によって現実的なものとなる。だから、対象である社会的共同体を現実的に把握することの意味は、実践理性に基づく行為によってその内容が個性である自己と社会的存在との一致と言う実在性が、求められるのである。

ヘーゲルが捉える行為する実践理性は、社会的共同体に関わることで現実的な生活過程における実践哲学の実在性を見出すのである。このような実践哲学は、われわれを取り巻く対象とする世界である社会的共同体において理性的な自己意識の自己実現を求めるのであるが、そこには必然的に他者性と相互承認が伴うことになる。対象である世界における実践哲学は、現実的で社会的共同体において他者の自由と承認のうちに自分自身の自由と承認を、求めて実現するのである。そこにおいては、実践哲学のうちに各人の自己意識は相互承認の関係にあり各々が自立的な他者性のうちに、自己を直観するのである。そのことの意味は、各人が現実的で社会的な共同体において各々の自立性を持ち自覚的に行為

することで、各人と社会的な諸関係のうちに自分自身を確信するのである。そこにおいて各人は、社会的な諸関係のうちに自己実現することを捉えることで社会的共同体を媒介にして行為することで、自らの目標を達成するのである。

そのことの意味は、他者性と相互承認のうちに自分自身が行為して承認されたいと言う対自の契機も共に本質的なものであることを経験することで、社会的な関係において自立的な本質が何であるかを現実的に把握するのである。この実践哲学は、自然や社会のなかに自己の確信する理性的な秩序を実現しようとして反省的に思考することで社会的共同体のなかで行為するのである。そこでは、他者性と相互承認のうちに自己自身と他者という個別性と普遍性との一致を見出すことで実践哲学の実在性を捉えることになる。こうした実践哲学は、自然や社会のなかに自己の確信する理性的な秩序を実現しようとするのである。だがしかし、そこにおいて実践哲学は、社会的な共同を意味する社会秩序のなかで行為することによって、自己と普遍性との一致を見出すことを現実的に把握し、実践哲学の実在性を捉えることにある。このようにヘーゲルは、現実との関わりのなかですべてが実在であると確信することで実践哲学を捉えているのである。

おわりに

このようにヘーゲルは、理性的な自己意識を自我と対象との統一であると確信しているのだが、まだ直接的で無媒介であり、自己が捉えるものは抽象的なものである。実在であると確信する理性は、その充実を求めて対象を観察し現実的に把握することのうちに、自我と存在とが統一にあると同時に対立があることを捉えるのである。そして、自己意識である自我は、対立を克服するために行う理性へと移行することになる。そこで自我と存在との関係は、客観的な実在のなかで対立を克服するとき普遍的な理性の立場が成立するのである。だがしかし、この普遍的な理性は、まだ個人的な意識という性格を持ち個人の立場を脱却していない理性である。ヘーゲルは、理性は人倫的な実体であり現実に存在するところのものを概念的に把握するのが、哲学の課題で

あるとしている。そこにおいて実践的な理性は、社会的な共同体を意味する社会的秩序のなかでわれわれが行為することによって、自己と他在する普遍性との一致を見出すことにある。そこで行為する理性は、社会的な共同体に関わることで自覚されたときに社会的な秩序や共同体において行為が成立するから、実践理性の実在性が確信される。

こうした実践理性は、あらゆる実在性であるという確信が真理にまで高められ、そして理性が自分自身をわれわれの世界としてまた我々の世界を自分自身として意識されたときに、実践哲学の実在性が捉えられるのである。ここにおいてヘーゲルは、対象である世界をこれまでのように理性や精神のうちに捉えるのではなくて、われわれを取り巻く社会的な共同体のうちに本質があることを、捉えているのである。そこにおいては、これまでのヘーゲル弁証法に見られる抽象的な概念の自己運動は姿を消して、対象を捉える現実的な実践哲学の実在性が考察されている。そして、この対象とする世界は、人間的な諸関係や社会的な生活の全体のことを弁証法的に把握され展開されている。そして、それらを概念的に把握し反省的に思考することで実践哲学の実在性が捉えられている。ヘーゲルが、こうした実践理性を単に人間の理性的で精神的な思考能力であるとした考え方から脱却して、それを普遍的な実践哲学の実在性にまで高めたことに意義があるだろう。

註

- (1) ヘーゲル『哲学入門』武市健人訳、岩波文庫、昭和50年 p. 150
理性についてヘーゲルは、『精神現象学』において不十分なところをその後のギムナジウムテキスト用として書かれたこの『哲学入門』において諸規定が詳述されている。
- (2) G.W.F.Hegel Enzyklopädie der philosophischen Wissenschaften III Suhrkamp taschenbuch Wissenschaft §.62. 邦訳、ヘーゲル『精神哲学』下、船山信一訳、岩波文庫、昭和50年 P. 63
- (3) イボリット『ヘーゲル精神現象学の生成と構造』市倉宏裕・他訳、岩波書店、1989年 p. 371
- (4) 同上書 p. 371

- (5) G.W.F.Hegel Phänomenologie des Geistes Johannes Hoffmeister §.255
邦訳、ヘーゲル『精神の現象学』上巻、金子武蔵訳、岩波書店、昭和48年 p. 351
- (6) ibid.§.255.邦訳、同上書 p. 351
- (7) ibid.§.256.邦訳、同上書 p. 352
- (8) ibid.§.256.邦訳、同上書 p. 352
- (9) ヘーゲル『哲学入門』武市健人訳、岩波文庫 昭和50年 p. 338
- (10) 同上書 p. 339
- (11) 同上書 p. 340
- (12) 同上書 p. 340
- (13) G.W.F.Hegel Enzyklopädie der philosophischen Wissenschaften III §.93
邦訳、ヘーゲル『精神哲学』下、船山信一訳、岩波文庫、昭和50年 P. 161
- (14) ibid.§.93.邦訳、同上書 p. 161
- (15) G.W.F.Hegel Phänomenologie des Geistes §.284
邦訳、ヘーゲル『精神の現象学』上巻、金子武蔵訳、岩波書店、昭和48年 p. 396
ここにおいてヘーゲルは、理性的な自己意識を概念的に把握することで実在性を捉えている。
- (16) ibid.§.284.邦訳、同上書 p. 396
- (17) ibid.§.284.邦訳、同上書 p. 397
- (18) ヘーゲル『哲学入門』武市健人訳、岩波文庫 昭和50年 p. 341
- (19) G.W.F.Hegel Enzyklopädie der philosophischen Wissenschaften III §.95.
邦訳、ヘーゲル『精神哲学』下、船山信一訳、岩波文庫、昭和50年 P. 165
- (20) ibid.§.95.邦訳、同上書 p. 165
- (21) ibid.§.96.邦訳、同上書 p. 167
- (22) 高田純『承認と自由』未来社、1994年 p. 17
- (23) 同上書 p. 17

(Received:September 30,2012)

(Issued in internet Edition:November 1,2012)